

競技スポーツにおけるゲームの流れについて

1180415 川端 勇輔

高知工科大学マネジメント学部

1. 概要

近年、様々なスポーツで選手から「流れ」に関する発言がよく聞かれる。実際、木戸（2012）によれば、スポーツゲームの実況者や解説者からも同様に、ゲームの様子をこれらの言葉で表現し、スポーツ観戦者にゲーム状況を抽象的に伝えている。しかし、具体的に「流れ」の正体を示すものではなく、その意味は多岐にわたり、勝敗や成功に大きく関わっている。

手束（2010）によれば、「スポーツの試合はこうした番狂わせが時として起こりうる。特に球技の場合は短距離走や跳躍競技、競泳のように人間の絶対能力だけでないものが作用する分だけ、番狂わせが起こる可能性も低くない。」と述べており、各スポーツにおける間接的諸条件が、選手に何らかの影響を与え、普段起こりえない状況が生まれることを示している。つまり、ルール上、選手の絶対能力が直接的に反映されず道具の使用等によって間接的に作用するスポーツにおいては、番狂わせが起こりやすくなるといえる。バレーボールは、ネットを挟んでボールを使用するが、身体条件が強く競技と関連性を有しており、選手が持つ絶対能力が試合に影響することは間違いない。だが手束は、『流れ』が見えやすい球技は、バレーボールである」とも述べていることから、バレーボールにおける選手の絶対能力以外に何らかの影響を受けていると考えられる。特にボールを保持し自ら考える時間がないというルール及び競技特性が深く「流れ」に影響していると考えられる。

バレーボールゲームにおける「流れ」の構造を明らかにすることを目的に研究を行った木戸（2012）によれば、バレーボールゲームにおける「流れ」の構造は、【見えない悪循環】【見えない好循環】【審判の強制力】【時間的猶予】の4つの概念によって構成されていると考え、また、4つの概念を包摂するコア・カテゴリーを『コートをめぐる主観的ゆらぎ』として位置づけた。（図1）

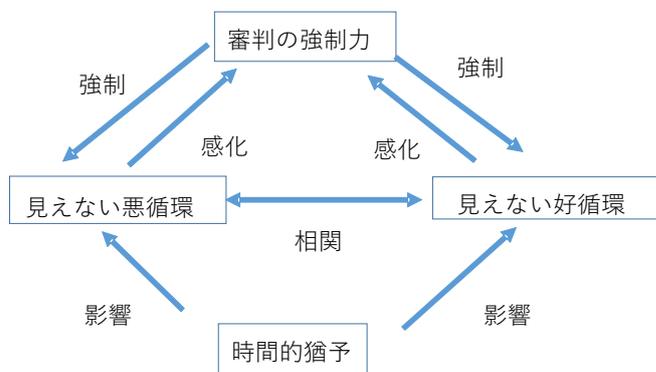


図1：バレーボールにおける流れの構造
（手束（2010）に基づき著者が作成）

2. 目的

木戸（2012）においては、今までの経験からネガティブなイメージしかなかった選手が予期しない得点をする事でチームがポジティブな状況へと方向付けられた場面に関する記述があった。この考え方をさらに広げると、相手チームがその選手の今までの経験やイメージを知らなかった場合この場面では普通の失点ととらえチームがネガティブな状況へ方向づけられないのではないかという問いが生じる。しかし、図1に示されているように、既存研究では一方にとってチームに流れがある状況においては、他方のチームにとっては流れが持っていかれている状況にあると想定されていると考えられる。そこで、本研究では、流れに対する解釈は本当に両チームの間で真逆の関係になるのか。もし真逆の関係でないならどのようにズレているのかを明らかにすることを目的とする。

3. 研究方法

3.1 調査方法

四国大学バレーボール連盟の1部リーグに所属する、高知工科大学女子バレーボール部に協力してもらい紅白戦を撮

影した。その後、両チームのセッターに個別でビデオを見ながらインタビューを行った。その際、選手独自の考えを知るために「流れ」の定義や本研究における詳しい内容については省略した。

(1) 対象者の選定とその性質

前述にあるように、今回の実験の対象者は両チームのセッターである。(箕輪 吉田 2001)よりセッターはチームにおいて最も重要なポジションであると解説している。

セッターは扇の要ともいえるポジションのため両チームの間で試合における特定の出来事に対する認識の「ズレ」が見出しやすいのではと考えた。

3.2 調査対象者の概要

本研究でインタビュー調査となった者の概要を述べる。

X氏(2回生)、Y氏(3回生)、Z氏(3回生)は高知工科大学女子バレーボール部のセッターである。

第1試合:

試合日時:10月6日20:00~21:00

試合場所:永国寺キャンパス体育館

インタビュー日時:Aチーム:10月10日13:00~13:50

対象者=同チームセッターX氏

Bチーム:10月10日14:40~15:20

対象者=同チームセッターY氏

第2試合:

試合日時:11月28日20:00~21:00

試合場所:永国寺キャンパス体育館

インタビュー日時:Bチーム:11月29日12:00~12:50

対象者=同チームセッターZ氏

Aチーム:11月29日13:00~14:00

対象者=同チームセッターX氏

第3試合~第5試合:

試合日時:1月21日11:00~12:45

試合場所:永国寺キャンパス体育館

インタビュー日時:Bチーム:1月21日13:10~14:30

対象者=同チームセッターZ氏

Aチーム:1月21日14:40~16:10

対象者=同チームセッターX氏

インタビューの音声はすべて録音し、書き起こしを行った。書き起こしのページ数はA4用紙76ページである。

4. データ収集結果

今回、1試合1セットという形で撮影を行った。第1試合と第2試合は異なったメンバーであり、第3試合~第5試合は同じメンバーで試合をしている。なお、第3回試合は十分なインタビューを行うことが出来なかったため今回の結果には省略する。また、第3試合~第5試合において、ある特定の選手がセット内で両方のチームでプレーしている(同ポジションの選手がいなかったため)。

なお、試合の出場選手は以下の表のとおりである。

表1:選手の出場表

選手No.	試合1		試合2		試合3		試合4		試合5	
	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B
1		●								
2*	●		●		●		●		●	
3		○		●		●		●		●
4*	○		○	○	○	○	○	○	○	○
5*	○		○		○		○		○	
6*		○	○	○	○	○	○	○	○	○
7*	○		○		○		○		○	
8*		○	○		○		○		○	
9*	○			○	○		○		○	
10				○		○		○		○
11			○			○		○		○
12		○	○		○		○		○	
13				○		○		○		○
14				○		○		○		○
15		○		○						
16						○		○		○
17	○									

(注1) ●は各試合においてセッターを務め、インタビューの対象となったことを示す。
(注2) ○はセッター以外のポジションを示す。
(注3) 各試合AB両方に○がついている選手は、試合中にチームを移動している。
(注4) *は2017のチャレンジリーグにおけるレギュラーメンバーである。

4.1 第1試合

試合の概況は以下の通りである。序盤はシーソーゲームを展開していたが、6-8の場面でAチームのセッターのミスからBチームが10ポイントを連取し一気に突き放した。Aチームも点差を積み重ねたが連続ポイントを取り返すまでにはいたらず、Bチームが勝利した。

次に両チームのセッターにインタビューした内容を要約したものを図2に掲載する。なおこの図において、場面番号は双方のスコアを合計したものである。(例 2-4 なら場面 6)

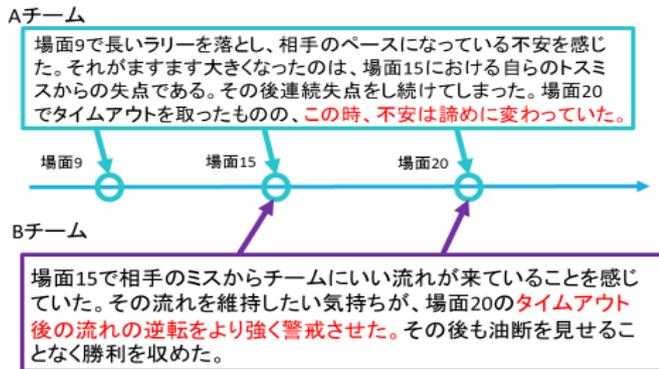


図2：両セッターの視点の要約文（第1試合）

次いで、図2に対する理解をより深めるために、各場面における双方の試合状況理解を事後的に聞き取った結果を示す。

表2：両者の比較表（第1試合）

	Aチームの考え	スコア	Bチームの考え
場面0	こちらがサーブしたボールが戻る際のスパイクをしっかりレシーブ出来たら、速攻を使うつもりだった。	0-0	相手が速攻を使うことを分かっていたのでブロックの準備ができていた。
場面9	長いラリーを落としてしまい相手のペースになってしまう不安。	4-5	
場面15	自らのトスマスから流れの変化を感じ取る。(10連続失点)	6-9	良い流れなので今のローテーションを続けていきたい。
場面20	このセットは捨てる。	タイムアウト(6-14)	まだまだ点を取りたい。TO後の流れの逆転を強く警戒。
場面24	次の試合につなげていこう。	6-18	
場面25		7-18	(10連続ポイントが途切れた時)油断していた部分があった。
場面29	相手がどんな攻撃でも決まってしまう状態になっていて諦めている。	8-21	点差は開いているけどしっかりいこう。

2つのデータから場面20の部分で両者の発言が真逆になっていないことがうかがえる。この時の両者の会話データを以下に示す。なお試合状況はAチームとBチームの試合で6-9から6-14と連続してBチームが得点し、Aチームがタイムアウトを取った場面である。

場面20（6-14でAチームがタイムアウトを取った場面）
 Aチーム
 X：次のゲーム、次のセットにつながるゲームをしよって言いました。
 聞き手：ほう。もうこのゲームはもう、、
 X：もう捨てゲームじゃないけど、なんか言い方悪いかもしれんけど、そんなこと思ったらいけんかもしれんけど、点

数が離れてしまったら、やっぱり、あたしらのセットは1セットじゃ終わらんので、(中略)次に持っていける展開をみんなの気持ちの持ちようを作っていこうって、、

Bチーム
 聞き手：連続ポイントが続いてるときってどんな気持ちなん？

Y：あー2点3点とかならこうまだあれなんですけど4点以上から続きだしたらもう流れがこっちに来てるんで、そのうちにほんとに広げれるぐらい広げたいってやってます。

(中略)もうとにかく早くいきたいんでどんどんどんどん。んでこのタイムアウト明けにミスしたりしたら向こうのあれじゃないですか。思うつぼというか。一回時間をおかれましたら。

上述の会話データから、Aチームのセッターは6-14のタイムアウトの地点で「捨てゲーム～」からわかるようにこのセットで勝つことを諦め、次のセットに活かせるプレーをしようと考えた。つまりAチームのセッターはこの試合はもう自分のチームに流れが来ないという絶望感からこのセットで勝つことを諦めたことがわかる。

これに対しBチームは、「タイムアウト明けにミスしたりしたら向こうの思うつぼ」からタイムアウト後の流れの逆転を警戒し、味方にも油断しないよう声をかけていた。

この試合では特定の場面を境に、一方が諦めているのに対し他方は警戒しているという解釈のズレが記録された。

4.2 第2試合

試合の概況は以下の通りである。この試合の簡単な内容としては、序盤Bチームが3-11まで最大8点差をリードしたが、3-10に取ったタイムアウト以降、徐々にAチームが差を縮めた。終盤、両チームは24-24のデュースになったが最後に、力尽きたのはAチームであった。

次に両チームのセッターにインタビューした内容を要約したものを図3に掲載する。

Aチーム

序盤の連続失点から余裕がなくなった。タイムアウトを取り気を落ち着かせようとしたものの、**場面27でこの試合ではサーブでの攻撃ができていない焦りを感じ**、場面31でもサーブミスで反撃の流れを止めてしまった。その後、なんとか同点に追いついたが、場面48以降、余裕のないプレーが勝負の分かれ目になり、敗北した。



Bチーム

序盤の連続得点で余裕が生まれたものの、タイムアウトを取られて以降、徐々に点差が縮まり、余裕は消えた。**場面25～場面28では、ある選手のサーブへの苦手意識も生まれていた**。不安が最大化したのは、場面44で自身がサーブミスした時だ。実際、場面48で追いつかれる。しかし、場面55のエースからの得点は不安を払拭するのに十分だった。そして、次の得点機会に勝利を決めた。

図3：両セッターの視点の要約文（第2試合）

次いで、図3に対する理解をより深めるために、各場面における双方の試合状況理解を事後的に聞き取った結果を示す。

表3：両者の比較表（第2試合）

	Aチームの考え	スコア	Bチームの考え
場面0	こちらがサーブしたボールが戻る際のスパイクをしっかりとレシーブ出来たら、速攻を使うつもりだった。	開始前	セッターは最初のポイントはエースにトスを上げると決めていた。
場面1		0-1	戦略的中し、得点できた。
場面3	スパイクがコート外に外れる。このミスで連続失点になることを予期する。 (結果連続5失点)	0-3	先にリードできたので楽に展開ができる。余裕が生まれた。
場面13	絶対取らないといかんボールを落とす。敗北を予期し気を引き締めるためにタイムアウトを取る。	3-10	相手がチャンスボールを落とす。このまま勝つ自信がないからタイムアウトを取ったと感じた。
場面13	今の落としたり話にならん。切り替えてやらないかん。	タイムアウト	自分たちのチームが押してるからこのままいこう。
場面14	タイムアウトのプレーで点数を取れずチームの士気が下がっている。	3-11	

表4：両者の比較表（第2試合）

場面18	序盤に使ってなかった速攻を使い得点できたことで突破口を見出す。	6-12	
場面19	相手の攻撃を防げず、より雰囲気が悪くなる。	6-13	前のポイントで相手が速攻を使ってきたので速攻でやり返そうと思った。
場面27	サーブで相手のレシーブを乱せていない。 今後の展開に対する不安。	12-15	
場面28	長いラリーを取り流れが来ている予感。しかし、過去のBチームとの戦績からの不安。	13-15	このセットの間ある選手のサーブに苦手意識が生まれている。
場面30		14-16	相手の決め球をブロックで防げず相手に勢いがついたかもしれない。
場面31	サーブミスで流れを止めてしまった。	14-17	しかしサーブミスにより助けられる。
場面37	レシーブの調子が悪い選手をサーブで狙い、得点をする。	18-19	

表5：両者の比較表（第2試合）

場面38		18-20	相手の両サイドのアタッカーが決まっていないので相手のプレーのぎこちなさを感じる。
場面43	スパイクを完璧にブロックされ流れの悪さを感じる。	19-24	
場面44		20-24	自身のサーブミスにより流れを止めてしまう。このミスが相手に追いつかれるかもしれない場面。
場面48	なんとか追いついたが勝ち癖がないためここから先の不安。気持ちの弱さ。	24-24	
場面55		27-28	エースの得点から勝利の確信。
場面56	最後接戦に持ち込めたものの勝ち切る雰囲気ではなかった。負けて当然。	27-29	全体的に相手の動きが良くなかったので終盤でも焦ることはなかった。

4つのデータから、場面27、場面28の部分で両者の発言が真逆になっていないことがうかがえる。この時の両者の会話データを以下に示す。なおAチームに関しては、12-15の試合状況に対するX氏の発言を、またBチームに関しては、13-15の試合状況に対するZ氏の発言を引用する。

場面27でのAチーム

X: サーブが走れてないですね。サーブの決定も少ない。崩すのは多いかもしれんけど。しかもサーブカットが崩れないんでこっち(相手)が。だいたいセッターの方に上がってきてるし、...

場面28でのBチーム

Z: この子がサーブの時に一番崩されてるっていう感じはありますね。こっちは、...

上述の会話データから、X氏の「サーブが走れてないですね」からわかるように、自チームのサーブの状態がよくないことを証言している。それに対し、Z氏はAチームの特定の選手のサーブに対する苦手意識の証言が確認された。

このように、この試合では、両チームのセッターの間でチーム状態の認識のズレが生じている。

4.3 第4試合

試合の概況は以下の通りである。両チームは、序盤は拮抗していたが、中盤にBチームが連続得点を重ね、同点、逆転に成功する。Aチームも何とか追いつがるが、終盤のミスとBチームのサービスエースが勝負の決め手となった。その結果、22-25でBチームが勝利した。

次に両チームのセッターにインタビューした内容を要約したものを図4に掲載する。

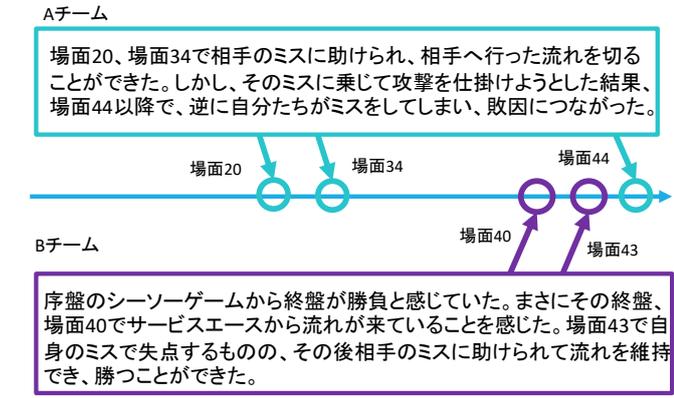


図4：両セッターの視点の要約文（第4試合）

次いで、図4に対する理解をより深めるために、各場面における双方の試合状況理解を事後的に聞き取った結果を示す。

表6：両者の比較表（第4試合）

	Aチームの考え	スコア	Bチームの考え
場面1	前のセットから同じコースへの攻撃に対処できていない。	0-1	
場面6		3-3	相手に弱点となるところを責められ苛立つ。
場面7	相手の中心選手の得意プレーに苦手意識がある。	3-4	
場面20	相手のミスに助けられ得点できたが連携が悪く今後の展開への不安を感じる。（結果3連続失点）	12-8	
場面25	得意なパターンの攻撃を防がれ流れの悪さを実感する。（結果4連続失点）	13-12	
場面32		16-16	良いプレーがあったが得点に繋がらず落胆する。
場面34	相手セッターがミスをし、相手に行っていた流れが切れた。	17-17	
場面40		20-20	サービスエースを決め、自チームに流れが来ているのを感じている。
場面43		22-21	流れが来ていたがトスマスをしてしまい落胆している。
場面44	相手のスパイクに対しブロックがつかずやっつけられないミスをしてしまった。	22-22	
	相手のミスに乗じて攻撃をすることが出来なかった。	試合後	20点以降の点の取り方が勝負の決め手だった。

3つのデータ、会話データを比較したところ両者の発言が真逆になっていない部分を見つけ出すことは出来なかった。

しかし、3つのデータを見てみると両者とも「ミス」について多くの発言が出ていることがわかる。つまり一方がミスをして流れを失ったと思う程度と他方が思う程度は均等であるため、ミスによる流れの解釈にはさほどズレがないのはいかと考えられる。

4.4 第5試合

試合の概況は以下の通りである。両チームは、序盤は拮抗していたが、5-4からBチームが6点を連取し差を広げたが、中盤以降Aチームが連続得点を重ね、接戦にもつれる。22-22の同点の場面でBチームがサーブミスをしてしまいそれが勝負の決め手となりAチームが勝利した。

次に両チームのセッターにインタビューした内容を要約したものを図に掲載する。

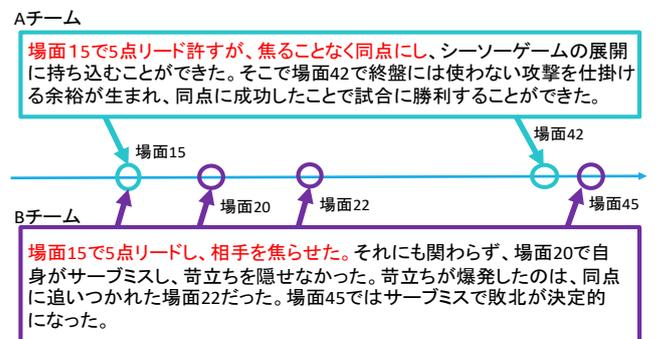


図5：両セッターの視点の要約文（第5試合）

次いで、図5に対する理解をより深めるために、各場面における双方の試合状況理解を事後的に聞き取った結果を示す。

表7：両者の比較表（第5試合）

	Aチームの考え	スコア	Bチームの考え
場面1	最初に速攻で得点できたことにより今後のプレーに幅を出すことが出来た。	1-0	
場面3		1-2	審判の誤審により得点でき安堵する。
場面4	誤審により流れが相手に動いていたが相手の連携ミスにより流れを引き戻すことができた。	2-2	
場面14	5連続得点され流れを断ち切りかけたが相手のサーブにレシーブが崩され落胆する。	5-9	
場面15	序盤に点差がついてしまったが焦りとかはなかった。	5-10	相手の雰囲気焦っているのを感じている。
場面20	自身のサーブミスでよい流れを切ってしまったが、相手のセッターがサーブミスをし安堵する。	9-11	追いつかれてきている場面でサーブミスをし少し苛立っている。

表 8：両者の比較表（第 5 試合）

場面22		11-11	5点差を追いつかれたにも関わらず危機感のないチームメートにいら立つ。
場面30		16-14	いつもならミスしない場面でミスが起こり今後の展開への不安。
場面42	普段なら終盤には使わない攻撃が決まり流れが来ていると感じた。	21-21	
場面25	相手のサーブミスにより勝利を確信した。	23-22	終盤にやっではいけないサーブミスをしてしまい流れが相手に行っていると感じた。
	前半の得点差を気にせずプレーできたのが決め手になった。	終了後	終盤のミスの仕方が敗北の決め手となった。

3つのデータから場面 15 の部分で両者の発言が真逆になっていないことがうかがえる。この時の両者の会話データを以下に示す。なお試合状況は 6 連続ポイントを取った 5-10 の後の場面での会話である。

<p>場面 15</p> <p>A チーム</p> <p>聞き手: ここで連続得点されたときこん時やばいなーとかは? X 氏: しょうみ前半は思わないです。流れは行っとるなーとは思うけど。こっからに二点、三点連続で取れば追いつくじゃないですか。</p> <p>B チーム</p> <p>聞き手: 相手チームみたらどう見える? 連続得点取ってるときに相手見たら焦って見えるのか。 Z 氏: やばいって思ってると思います。</p>

上述の会話データから、点差を突き放した Z さんの「(相手チームが)やばいって思っている。」からわかるように連続失点から相手が焦っている雰囲気があることを感じ取ることが理解できる。それに対し連続得点をされた X さんは「前半は(焦りは)思わないです。」からわかるように、X さんは点差を離されたがまだ前半なので取り返せるということが読み取れる。

以上を踏まえ、一方のチームは相手を焦らせたと思っていたが、他方のチームに焦りはなかったことが分かった。

5. 結論

本研究は、流れに対する解釈は本当に対戦する 2 チームの間で真逆の関係になるのか、もし真逆の関係でないならどのようにズレているのかを明らかにすることを目的としていた。そして 5 つの試合を分析した結果、3 つの発見を得ることができた。

発見 1: 一方のチームにおける諦めの強さと他方のチームにおける勝利の確信の強さは同じ強さで推移しているわけではない。

例として第 1 試合では一方が諦めているのに対し、他方は形勢の逆転を警戒していた。

発見 2: 一方のチームにおける焦りの強さと他方のチームにおける余裕の強さは同じ強さで推移しているわけではない。

例として第 5 試合では一方のチームは相手を焦らせたと思っていたが、他方のチームに焦りはなかった。また、第 2 試合では一方は余裕がないケースが続く、他方は余裕が不安に変わるケースがあった。つまり、無くなった余裕は取り戻しにくく、得た余裕は失いやすいということである。

発見 3: 一方がミスをして流れを失ったと思う程度と、他方が流れが来たと思う程度は均等である。

例として第 4 試合ではミスによる流れの解釈には、さほどずれていないことが分析結果からわかる。

以上を踏まえると、バレーボール従事者(プレーヤー、指導者)にとって、試合のある特定の場面における過去の振り返り方(物語化の仕方)は複数存在することがわかった。通常、プレーヤーは無意識的に一つの物語を選択していると思われるが、それ以外の物語の探索能力を向上させることで、より多くの物語から自分の意志で一つを選び、次の場面に臨むことを可能にする。本研究の 3 つの発見は、その具体的な方法を教えてくれる。

6. 今後の課題

1 つ目は、第 1 試合分の撮影実施日程とインタビューの日程に少し時間差があった点である。本研究では選手の内観が重要なことから記憶が鮮明なゲーム直後に調査を実施すべきであった。

2 つ目は、本研究が撮影した試合が紅白戦という点であ

る。公式戦と異なり、格差のある編成、ポジション不足から、特定の人物が試合内でチームを移動する非現実な設定があり、モチベーションが異なるため、流れの分析に影響があったことは否定できないが、両チームのセッターとも「影響はさほどなかった」という発言もあったため、本研究で得られた結果は一定以上の意義があると言える。また、木戸

(2012)によれば、「流れ」に対する意識の高さ又は読みの深さは、チームの競技力の高さと強く関連するものと考えられている。今回、四国大学バレーボール連盟の1部リーグに所属する高知工科大学女子バレーボール部を対象に研究を行ったが、流れに対する解釈や、試合状況理解が不十分な点が多々あったと思われる。今後、より高い競技力を有したチームを対象にすることで新たな発見が見つかるだろう。

7. 引用・参考文献

[1] 木戸卓也(2012 6月) バレーボール研究第14巻 第1号

“バレーボールにおけるゲーム中の「流れ」に関する社会学的考察” 一大学生プレイヤーの会話データに対する質的分析作業をもとに

[2] 手束仁(2010):”流れの正体” -もっと野球が好きになる-、日刊スポーツ出版社、p162、pp190-191、

[3] 箕輪憲吾、吉田敏明(2001 5月) バレーボール研究第3巻 第1号 “バレーボールゲームにおけるセッターに関する研究”